名古屋大学附属図書館二〇一一年春季展

古筆切をたのしむ

前期 『新古今』の時代
平成二十三年四月十二日(火)～五月九日(月)

後期 南北朝の人びと
平成二十三年五月十三日(金)～六月九日(木)

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

名古屋大学附属図書館2011年春季特別展
古筆切をたのしむ

発　行　日　2011年4月12日
監　　修　塩村 耕
構成・執筆　箕田 将樹
編集・発行　名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町 B3-2(790)
TEL : 052-789-3667　FAX : 052-789-3693
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp
©名古屋大学附属図書館

はじめに

「古筆」とは、広義には古人の筆蹟、狭義には平安時代から鎌倉時代にかけての日本人の書を指していいます。古筆の多くは、もともと巻子本や冊子本に仕立てられていた書物ですが、室町時代の茶道の流行を背景に、「古筆切」と呼ばれる一葉数行から十行程度の断簡（切）に分割され、諸方に拡散しました。古筆切は、軸装されて茶席の装飾品になり、また手鑑に貼り合わせて鑑賞用に供されました。中でも、貴族趣味を反映した豪華な料紙に書かれた古筆切は、贈答品として人々に喜ばれました。このような古筆愛好の慣習は、古典籍の大量破壊を招いた反面、その部分的な保存に繋がり、多様な貴重資料を断片として今日に伝えました。

ただ古筆切は断片ゆえに、本来ならば奥書や識語から知られるはずの、書写者や書写年時がわからなくなってしまうという問題が生じました。そこに登場し活躍したのが、「古筆見」と称される鑑定の専門家たちです。その第一人者の平沢了佐（一五七二～一六六二）は、古筆愛好家でもあった関白豊臣秀次（一五六八～一五九五）にその才能を認められ、「古筆」の家名と「琴山」の印章を下賜されました。以後、江戸時代を通して、古筆本家と分家の代々およびその門人たちによる筆蹟鑑定が盛んに行われます。

鑑定済みの古筆切には、「極札」という古筆見が発行した証明書が添えられます。極札は、通常、短冊形の紙片を用い、その表面に推定される古筆切の筆者名と書き出しが記され、「極印」という承認印が捺されます。そして裏面には鑑定年月の注記と鑑定者の印章の押捺がしばしば見られます。古筆見たちが愛用した印章をまとめた刷物は、幕末に至るまで刊行され、古筆人気が高かったことを偲ばせます。

今回の展示は、本学文学部名誉教授の後藤重郎（一九二一～二〇〇六）氏が蒐集した『新古今和歌集』の古筆切の中でも、名品を厳選して公開するものです。

◆享保十五年（一七三〇）刊「古筆目利名寄極印鑑」＊文学部塩村耕教授蔵

◆古筆本家歴代の墓（臨済宗西王寺、京都市中京区西ノ京中保町）
※正面中央が古筆家初代了佐の記念碑。

◆『新古今和歌集』

鎌倉時代初期に成立した八番目の勅撰和歌集で、四季・賀・哀傷・離別・羇旅・恋・雑・神祇・釈教の部立により全二十巻に編成される。流布本で千九百七十九首の歌を収録する。建仁元年（一二〇一）、後鳥羽院（一一八〇～一二三九）の院宣により、源通具（一一七一～一二二七）・六条有家（一一五五～一二一六）・藤原家隆（一一五八～一二三七）・藤原定家（一一六二～一二四一）・飛鳥井雅経（一一七〇～一二二一）・寂蓮（一一三九～一二〇二）の六名を撰者として編纂が開始され、元久二年（一二〇五）に一旦完成、その後も改修作業が継続された。巻頭に藤原良経（一一六九～一二〇六）の仮名序、巻末に藤原親経（一一五一～一二一〇）の真名序を付す。代表歌人に西行（一一一八～一一九〇）・慈円（一一五五～一二二五）・良経・藤原俊成（一一一四～一二〇四）・式子内親王（一一四九～一二〇一）等がいる。

後鳥羽院は、承久の乱（一二二一）の結果、隠岐へ配流されるが、その後も十八年の歳月を費やし、『新古今和歌集』から約四百首を除いた精選本を作成した。この後鳥羽院が隠岐で推敲した本は、隠岐本と称される。隠岐本の本文の右肩にしばしば見られる朱墨の符号（合点）は、選出ないし削除を示す作業中の記号である。今回の展示では、隠岐本の合点を★印で統一表記してある。

前期

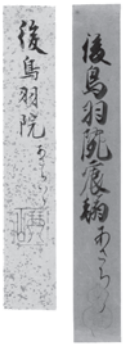
【1】（伝）後鳥羽院　後藤古筆55

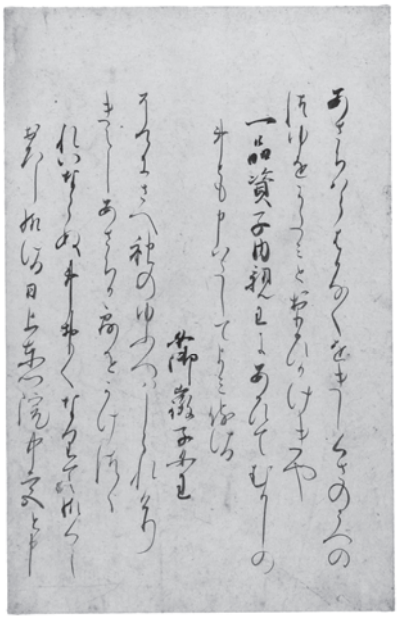
新古今、巻八、哀傷歌、七七七～七七九。縦二十四・一糎、横十五・三糎。

極札①表に「後鳥羽院宸翰〈あさぢはら〉（朱瓢形印「牛庵」）」。畠山牛庵（二代）。②表に「後鳥羽院〈あさぢはら〉（墨方印「琴山」）」。古筆了博（十一代）か。

後鳥羽院は治承四年（一一八〇）～延応元年（一二三九）。平安末期から鎌倉初期の第八十二代天皇。在位は寿永二年（一一八三）～建久九年（一一九八）。

『徳川黎明会叢書古筆手鑑篇』一「玉海」所収の伝後鳥羽院筆新古今集切に筆蹟類似。





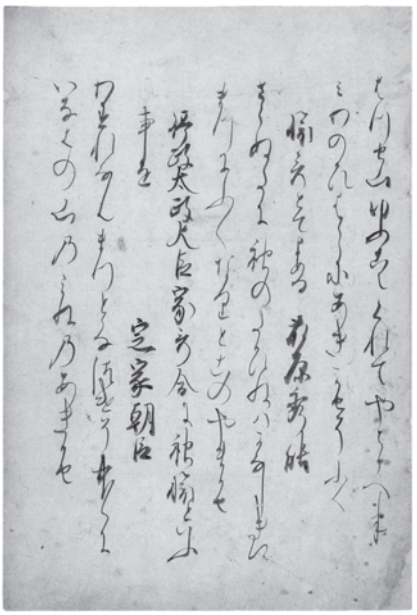
あさぢはらはかなくをきしくさのうへの
つゆをかたみとおもひかけきや
一品資子内親王にあひて、むかしの
事ども申いだしてよみ侍ける
女御徽子女王
そでにさへ秋のゆふべはしられけり
きえしあさぢが露をかけつゝ
れいならぬ事おもくなりて、御ぐし
おろし給ける日、上東門院、中宮と申

【2】（伝）後鳥羽院　後藤古筆56

新古今、巻十、羇旅歌、九六六～九六八。縦二十三・六糎、横十五・九糎。

極札①表に「後鳥羽院〈はつせ山〉（朱瓢形印「牛庵」）」。畠山牛庵（二代）。②表に「後鳥羽院〈はつせ山〉（朱方印「伝庵」）」。畠山牛庵（二代）。

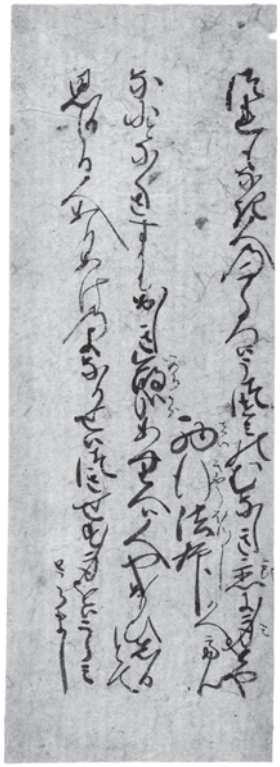
『古筆学大成』十所収の伝後鳥羽天皇筆新古今集切一と同筆。



はつせ山ゆふこえくれてやどゝへば
みわのひばらにあきかぜぞふく
旅歌とてよめる　藤原秀能
さらぬだに秋のたびねはかなしきに
まつにふくなりとこのやまかぜ
摂政太政大臣家歌合に、秋旅といふ
事を　定家朝臣
わすれなんまつとなつげそ中〳〵に
いなばの山のみねのあきかぜ

【3】伝承筆者不明　後藤古筆64

新古今、巻十二、恋歌二、一一四六～一一四八。縦二十・四糎、横七・二糎。『古筆学大成』十所収の伝寂蓮筆新古今集切四に筆蹟類似。



つれもなき人のこゝろはうつせみのむなしき恋に身をやかへてん
西行法師
なにとなくさすがにおしき命哉ありへば人やおもひしるとて
思ひしる人ありあけのよなりせばつきせず身をばうらみざらまし

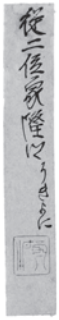
【4】（伝）藤原家隆　後藤古筆24

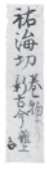
新古今、巻十六、雑歌上、一五三六～一五三九。隠岐本合点あり。縦二十三・七糎、横十六・一糎。

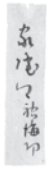
極札表に「従二位家隆卿〈うきよに〉（墨方印「守山」）」。古筆了任（分家二代）。外に墨書附箋二点を添付。①「祐海切〈巻物ナリ／新古今雑上／□〉」。②「家隆卿〈祐海切〉」。

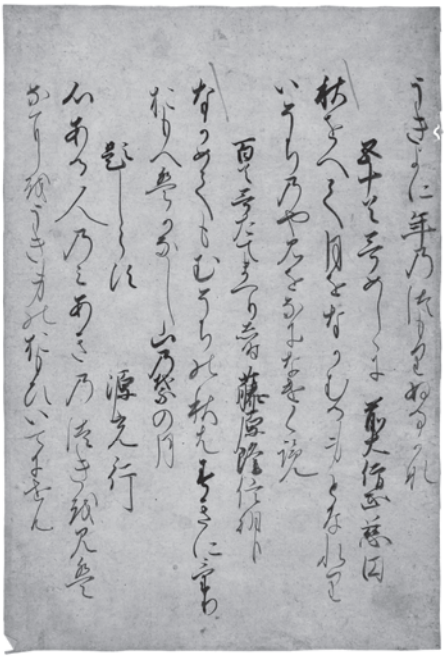
藤原家隆は公家。保元三年（一一五八）～嘉禎三年（一二三七）。権中納言藤原光隆の男。

『日本書蹟大鑑』四所収の伝家隆筆熊野懐紙、『昭和新修日本古筆名葉集』所収の伝家隆筆古今集切に筆蹟類似。









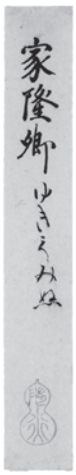
うきよに年のつもりぬるかな
五十首歌めしゝに　前大僧正慈円
★秋をへて月をながむる身となれり
いそぎのやみをなになげく覧
百首歌たてまつりし時　藤原隆信朝臣
★ながめてもむそぎの秋はすぎにけり
おもへばかなし山のはの月
題しらず　源光行
心ある人のみあきのつきを見ば
なにをうき身のおもひいでにせん

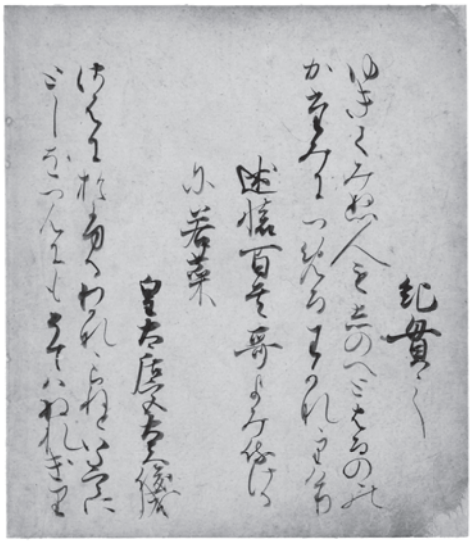
【5】（伝）藤原家隆　後藤古筆103

新古今、巻一、春歌上、一四・一五。縦十六・六糎、横十四・四糎。

極札①表に「家隆卿〈ゆきてみぬ〉（朱瓢形印「随道」）」。畠山牛庵（三代）。②表に「家隆卿〈ゆきてみぬ〉（墨方印「琴山」）」。裏書「切乙未霜（墨楕円印「了音」）」。古筆了音（六代）。

『古筆学大成』十所収の伝家隆筆新古今集切三に筆蹟類似。





紀貫之

ゆきてみぬ人もしのべとはるのゝ
かたみにつめるわかなゝりけり

述懐百首歌よみ侍りる
に、若菜　皇太后宮大夫俊成

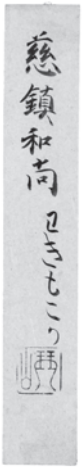
さはにおふるわかなゝらねどいたづらに
としをつんにもそではぬれけり

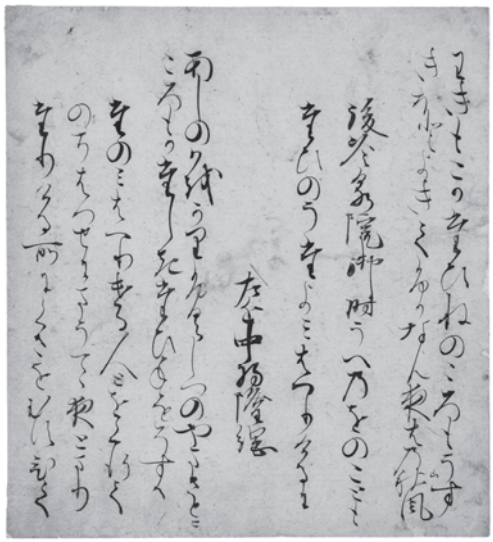
【6】（伝）慈円　後藤古筆22

新古今、巻十、羇旅歌、九二一～九二三。隠岐本合点あり。縦十六・四糎、横十四・八糎。

極札表に「慈鎮和尚〈わぎもこの〉（墨方印「琴山」）」。裏書「切壬子二（墨楕円印「了延」）」。古筆了延。

慈鎮（慈円の諡号）は僧侶・歌人。久寿二年（一一五五）～嘉禄元年（一二二五）。関白藤原忠通の男。





わぎもこのたびねのころもうす
きほどよきてふかなん夜はの秋風

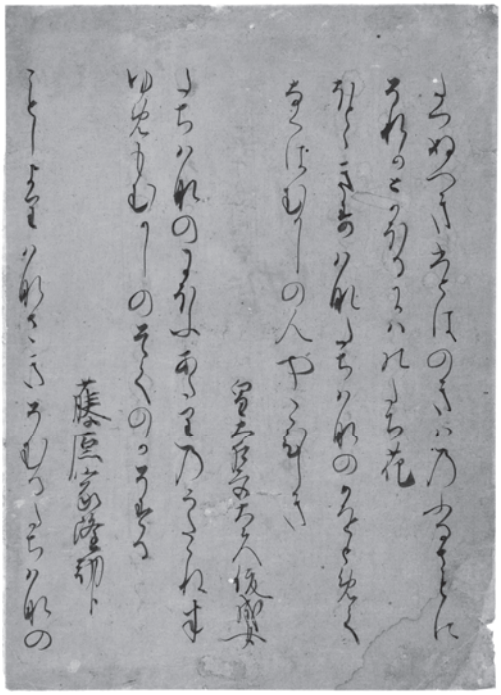
後冷泉院御時、うへのをのこども
たびのうたよみはべりけるに
★左近中将隆綱

あしのはをかりふくしづのやまざとに
ころもかたしきたひねをぞする

たのみはべりける人とをく行て
のち、はつせにまうでゝ、夜とまり
たりける所に、くさをむすびて、

【7】伝承筆者不明　後藤古筆30

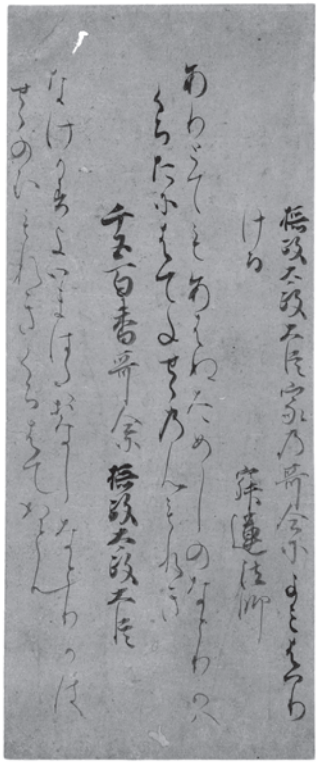
新古今、巻三、夏歌、二四三〜二四六。縦二十・七糎、横十四・九糎。
本紙裏書「な」（墨書）、「の」（朱書）。
『古筆学大成』十所収の伝慈円筆新古今集切一（五十・五十八）に筆蹟類似。

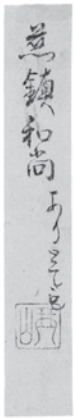


たづぬべきひとはのきばのふるさとに
それかとかほるにはのたち花
ほと、ぎすはなたちばなのかをとめて
なくはむかしの人やこひしき
皇大后宮大夫俊成女
たちばなのにほふあたりのうた、ねは
ゆめもむかしのそでのかぞする
藤原家隆朝臣
ことしよりはなさきそむるたちばなの

【8】（伝）慈円　後藤古筆48

新古今、巻十二、恋歌二、一一一八・一一一九。縦二十四・三糎、横十糎。
極札表に「慈鎮和尚〈ありとても〉（墨方印「琴山」）」。古筆了祐（三代）か。



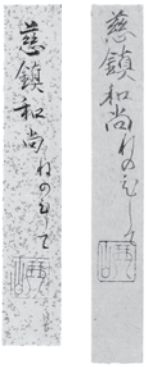


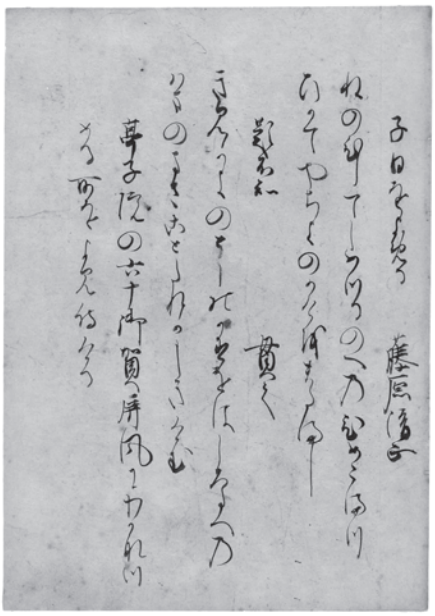
摂政太政大臣家の歌合によみはべり
ける　寂蓮法師
ありとてもあはぬためしのなとりがは
くちだにはてねせゞのむもれぎ
千五百番歌合に　摂政太政大臣
なげかずよいまはたおなじなとりがは
せゞのむもれぎくちはてぬとも

【9】（伝）慈円　後藤古筆51

新古今、巻七、賀歌、七〇九～七一一。縦二十一・七糎、横十五・二糎。

極札①表に「慈鎮和尚〈ねのびして〉（墨方印「琴山」）」。裏書「ねのびして切寅霜」。古筆了栄（二代）か。②表に「慈鎮和尚〈ねのびして〉（墨方印「琴山」）」。古筆了博（十一代）か。





子日をよめる　藤原清正
ねのびしてしめつるのべのひめこまつ
ひかでやちよのかげをまたまし
題不知　貫之
きみがよのとしのかずをばしろたへの
はまのまさごとたれかしきけむ
亭子院の六十御賀屏風に、わかなつ
める所をよみ侍ける

【10】（伝）藤原清範　後藤古筆38

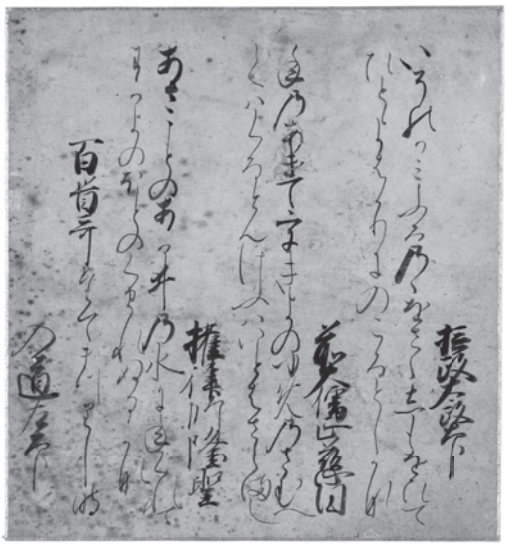
新古今、巻六、冬歌、六九八～七〇一。縦十六・二糎、横十五糎。

極札表に「藤原清範朝臣〈いそのかみ〉（朱方印「養心」）」。裏書「切　戊子七（墨長方印「定盤」）」。神田道伴（四代）。

藤原清範は公家。生没年未詳。平安時代末期より鎌倉時代初期の人。

『古筆学大成』十所収の伝清範筆西山切、『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝清範筆西山切甲に筆蹟類似。

六九八番歌の第三句は通常「しもをへて」で、現行の諸注釈は「霜を経て」と解釈する。「しもをひて」の歌形は未確認ながら、「霜帯びて」で意味は通ずる。久保田淳『新古今和歌集全評釈』三に「『尾張』（石原正明『尾張廼家苞』）は……「『霜をへて』といひてはきこえぬ事也」と批判を加える」とあり。



摂政太政大臣
いそのかみふるのゝをざゝしもをびて
ひとよばかりにのこるとしかな
前大僧正慈円
年のあけてうきよのゆめのさむべ
くはくるともけふはいとはざらまし
権律師隆聖
あさごとのあか井の水に年くれて
わがよのほどのくまれぬるかな
百首歌たてまつりし時
入道左大臣

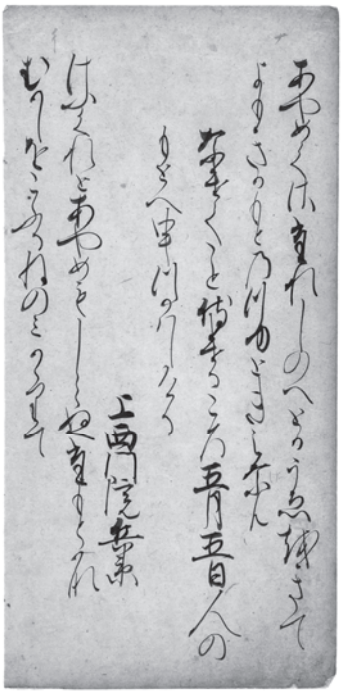
【11】（伝）後京極良経　後藤古筆19

新古今、巻八、哀傷歌、七六九・七七〇。撰者名注記【有】は有家、【衛】は通具。縦二十二・七糎、横十一・二糎。

極札表に「後京極殿良経公（墨方印「□主」）」。裏書「（墨方印「□□」）」。朝倉茂入（二代、景頼）。本紙裏書「四半新古今切」。

九条良経は公家。仁安四年（一一六九）～元久三年（一二〇六）。九条兼実の次男。

『古筆切影印解説Ⅰ』所収の伝良経筆古今集四半切、『古筆切影印解説Ⅲ』所収の伝良経筆新古今集四半本に筆蹟類似。



【有】あやめぐさたれしのべとかうゑをきて
よもぎがもとのつゆときえなん
なげくこと侍けるころ、五月五日、人の
もとへ申つかはしける
上西門院兵衛

【衛】けふくれどあやめもしらぬたもとかな
むかしをこふるねのみかゝりて

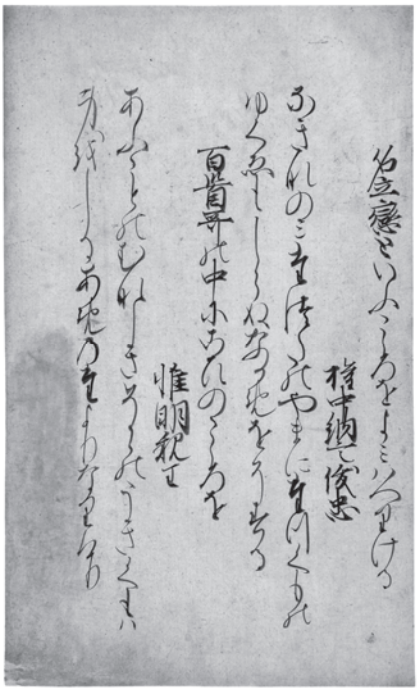
【12】（伝）九条道家　後藤古筆52

新古今、巻十三、恋歌三、一一三三・一一三四。縦二十四・四糎、横十四・九糎。

極札表に「光明峯寺殿道家卿〈なきなのみ〉（墨方印「琴山」）」。裏書「切　癸巳二（墨楕円印「了音」）」。古筆了音（六代）。

九条道家は公家。建久四年（一一九三）～建長四年（一二五二）。良経の嫡男。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集』所収の伝道家筆備中切、『徳川黎明会叢書古筆手鑑篇』四「鳳凰台」所収の伝道家筆備中切に筆蹟類似。



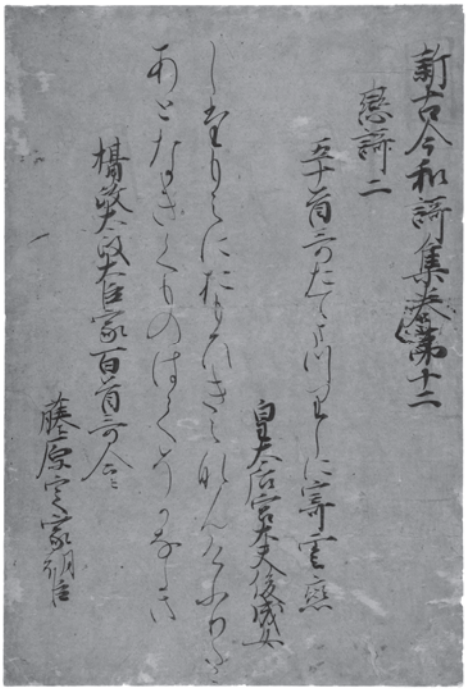
名立恋といふこゝろをよみはべりける
権中納言俊忠
なきなのみたつたのやまにたつくもの
ゆくゑもしらぬながめをぞする
百首歌の中にこひのこゝろを
惟明親王
あふことのむなしきそらのうきぐもは
身をしるあめのたよりなりけり

【13】伝承筆者不明　後藤古筆60

新古今、巻十二、恋歌二、一〇八一・一〇八二。朱書合点あり。縦二十一・八糎、横十四・七糎。

後藤重郎氏の鉛筆書メモに「後鳥羽院水無瀬切類切（一誠堂酒井氏）」とあり。ただし、水無瀬切とは筆蹟類似せず。

『古筆学大成』十所収の伝九条道家筆備中切本新古今集に筆蹟類似。



新古今和歌集巻第十二
恋歌二
★五十首歌たてまつりしに、寄雲恋
皇太后宮大夫俊成女
したもえにおもひきえなんけぶりだ〔に〕
あとなきくものはてぞかなしき
★摂政太政大臣家百首歌合に
藤原定家朝臣

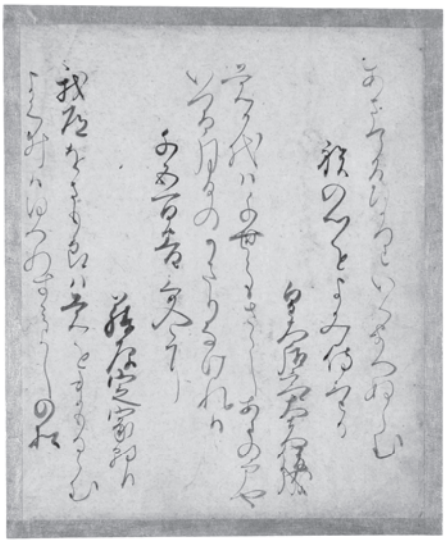
【14】（伝）世尊寺行能　後藤古筆50

新古今、巻七、賀歌、七三七～七三九。縦十五・九糎、横十三・一糎。

極札表に「世尊寺行能卿（あまてるひかり）（墨方印「琴山」）」。裏書「切辛卯極（墨小楕円印「了音」）」。古筆了音（六代）。

世尊寺行能は公家。治承四年（一一八〇）～没年未詳。伊経の男。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝行能筆宇治切甲、乙、丙、【15】のツレ。

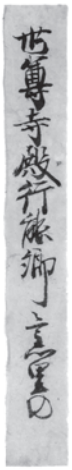


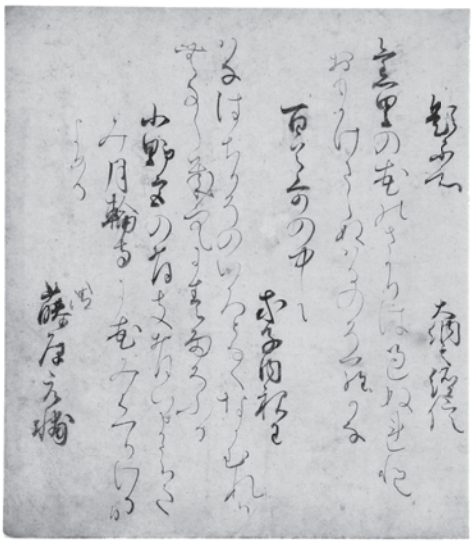
あまてるひかりいくよへぬらむ
祝の心をよみ侍ける
皇太后宮大夫俊成
君が代は千世ともさゝじあまの戸や
いづる月日のかぎりなければ
千五百番歌合に
藤原定家朝臣
我道をまもらば君をまもるらむ
よはひはゆづれすみよしの松

【15】（伝）世尊寺行能　後藤古筆99

新古今、巻二、春歌下、一四八～一五〇。縦十六糎、横十四糎。

極札表に「世尊寺殿行能卿〈旧里の〉」。本紙裏書「世尊寺殿行能卿」。





題不知　　大納言経信

旧里の花のさかりは過ぬれど
おもかげさらぬはるのそらかな

百首歌の中に　　式子内親王

はなはちりそのいろとなくながむれば
むなしき空に春雨ぞふる

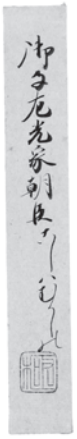
小野宮のおほきおほいまうちぎみ、月輪寺に花みはべりける日よめる　　藤原元輔

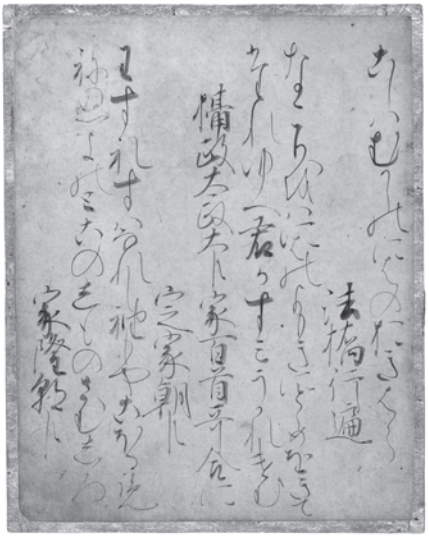
【16】（伝）藤原光家　後藤古筆67

新古今、巻十四、恋歌四、一二八九～一二九二。縦十七糎、横十三・四糎。

極札表に「御子左光家朝臣〈こしはむかしの〉（墨方印「極」）」。裏書「六半切乙酉十（墨楕円印「川宗」）」。川勝宗久（初代）。本紙裏書「（墨方印「茂内□□」）光家卿　六半新古今切」。朝倉茂入（初代）。

藤原光家は伝不詳。定家の子為家の兄。侍従。





こしはむかしのにはのおぎはら　　法橋行遍

なごりをばにはのよもぎにとゞめをきて
たれゆへ君がすみうかれけむ

摂政太政大臣家百首歌合に　　定家朝臣

わすれずはなれし袖もやこほる覧
ねぬよのとこのしものさむしろ　　家隆朝臣

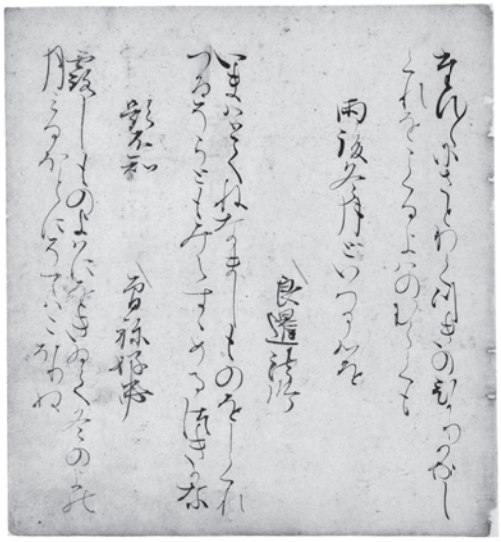
【17】（伝）藤原為家　後藤古筆9

新古今、巻六、冬歌、五九九～六〇一。隠岐本合点あり。縦十六・八糎、横十五・五糎。

極札表に「為家卿〈たえ〴〵に〉（墨方印「琴山」）」。本紙裏書「切辛卯四（墨楕円印「了音」）」。古筆了音（六代）。

藤原為家は公家。建久九年（一一九八）～建治元年（一二七五）。藤原定家の男。

『古筆学大成』十所収の伝為家筆新古今集切一のツレ。

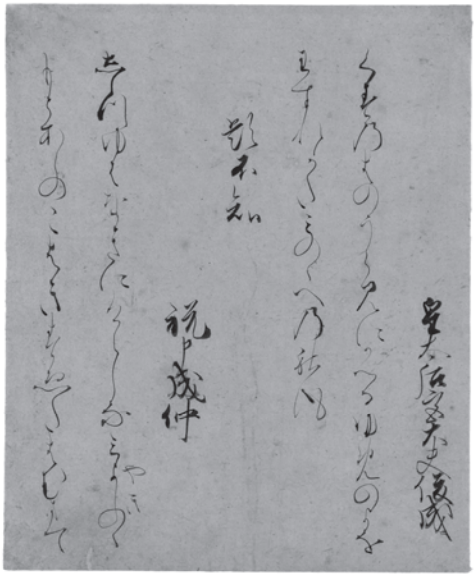


たえ〴〵にさとわくつきのひかりかなし
ぐれを丶くるよはのむらくも
雨後冬月といへる心を
★良暹法師
いまはとてねなましものをしぐれ
つるそらともみえず丶めるつきかな
題不知
★曽祢好忠
露じものよはにをきゐて冬のよの
月みるほどにそではこほりぬ

【18】（伝）藤原為家　後藤古筆76

新古今、巻十六、雑歌上、一五六三・一五六四。縦十六・四糎、横十三・四糎。

極札表に「皇太后宮大夫　為家卿（墨楕円印「長好」）」。藤井常智。



皇太后宮大夫俊成
くずのはのうらみにかへるゆめのよを
わすれがたみの丶べの秋風
題不知
祝部成仲
しらつゆはをきにけらしなみよしの丶
もとあらのこはぎすゑたはむまで

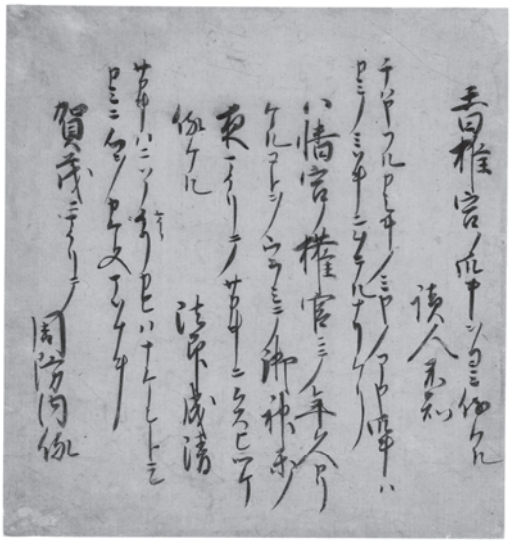
【19】（伝）藤原為家　後藤古筆85

新古今、巻十九、神祇歌、一八八六～一八八八。縦十七・七糎、横十六・七糎。

極札表に「二条家為家卿〈香椎宮〉（墨方印「守村」）」。古筆了仲（分家十三代）か。

『古筆学大成』十所収の伝藤原清輔筆片仮名本新古今集切のツレか。

香椎宮ノスギヲヨミ侍ケル
読人不知
チハヤブルカシヰノミヤノアヤスギハ
カミノミソギニタテルナリケリ
八幡宮ノ権官ニテ年久カリ
ケルコトヲウラミテ、御神楽ノ
夜マイリテ、サカキニムスビツケ
侍ケル
法印成清
サカキバニソノ|イフカヒハナケレドモ
カミニ心ヲカケヌマゾナキ
賀茂ニマイリテ
周防内侍



後期

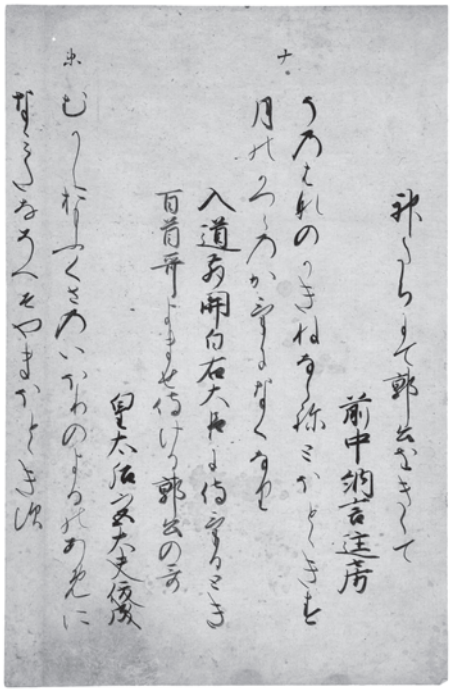
【1】（伝）慶運　後藤古筆1

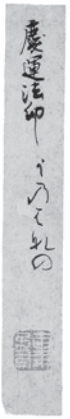
新古今、巻三、夏歌、二〇〇・二〇一。撰者名注記【有】は有家、【衛】は通具。縦二十三・二糎、横十五・一糎。

極札表に「慶運法師　うのはなの（朱白文方印、印文不明）」。本紙裏書「慶運」。

慶運は僧侶（天台）・歌人。生没年未詳。応安二年（一三六九）七十歳以上で生存。法印浄弁の男。浄弁・頓阿・兼好とともに和歌四天王と称された。

神だちにて郭公をきゝて
前中納言匡房
【有】うのはなのかきねならねどほとゝぎす
月のかつらのかげになくなり
入道前関白、右大臣に侍けるとき、
百首歌よませ侍ける、郭公の歌
皇太后宮大夫俊成
【衛】むかしおもふくさのいほりのよるのあめに
なみだなそへそやまほとゝぎす

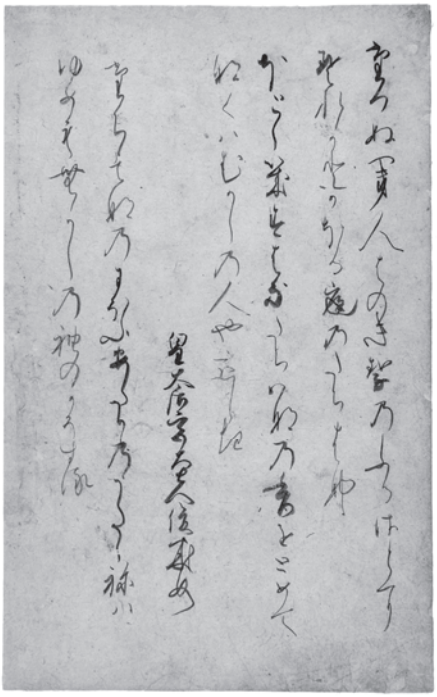




【2】（伝）慶運　後藤古筆29

新古今、巻三、夏歌、二四三～二四五。縦二十四糎、横十五・一糎。

極札表に「慶運法印〈たづぬべき〉（墨方印「守村」）」。古筆了仲（分家三代）か。



たづぬべき人はのきばのふるさとに
それかとかほる庭のたちばな
ほと、ぎすはなたちばなの香をとめて
なくはむかしの人や恋しき
皇太后宮大夫俊成女
たちばなのにほふあたりのうた、ねは
ゆめもむかしの袖のかぞする

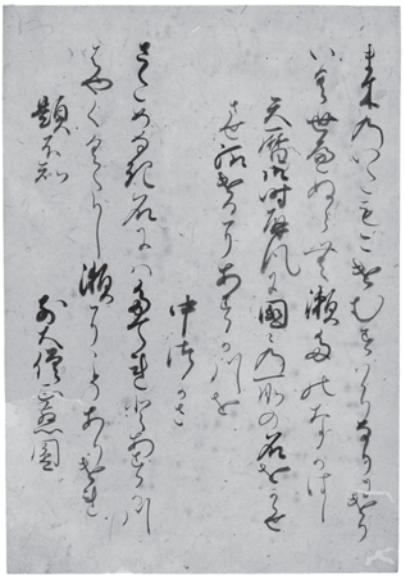
【3】（伝）油小路隆蔭　後藤古筆80

新古今、巻十七、雑歌中、一六五六～一六五八。縦二十四糎、横十六・九糎。

極札表に「油小路隆蔭卿〈ま木のいたも〉」。古筆了音（六代）に筆蹟やや類似。

油小路隆蔭は公家。永仁三年（一二九五）～貞治三年（一三六四）。西大路（四条）隆政の男。油小路家の祖。

『古筆手鑑大成』三「文彩帖」所収の伝隆蔭筆新古今集切、同十三「手鑑」所収の伝隆蔭筆新古今集切、『徳川黎明会叢書古筆手鑑篇』三「藻叢」所収の伝隆蔭筆新古今集切に筆蹟類似。



ま木のいたもこけむすばかりなりにけり
いく世へぬらむ瀬たのながはし
天暦御時、屏風に国々の所の名をかゝせ
させ給けるに、あすか川を
中つかさ
さだめなき名にはたてれどあすか川
はやくくだりし瀬にこそありけれ
題不知　前大僧正慈円

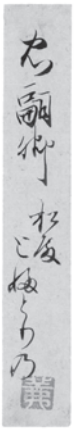
【4】（伝）松殿忠嗣　後藤古筆49

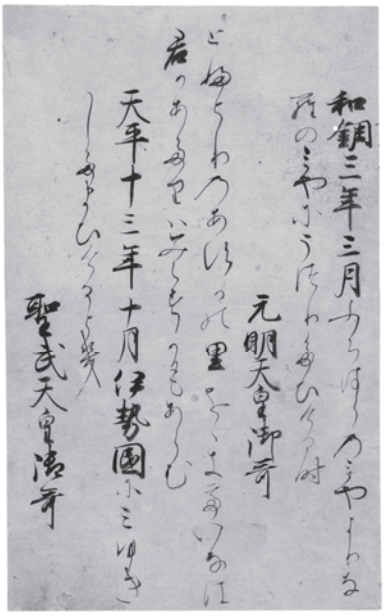
新古今、巻十、羇旅歌、八九六・八九七。縦二十・三糎、横十二・七糎。

極札表に「忠嗣卿〈松殿／とぶとりの〉（朱白文方印「□」）」。本紙裏書「松殿忠嗣卿」。

松殿忠嗣は公家。永仁五年（一二九七）～永和三年（一三七七）。道輔の男。

『古筆手鑑大成』四「藻塩草」所収の伝忠嗣筆馬場切、同十三「手鑑」所収の伝忠嗣筆新古今集切に筆蹟類似。





和銅三年三月、ふぢはらのみやよりならのみやにうつりたま〔ま〕ひける時
元明天皇御歌
とぶとりのあすかの里をゝきていなば
君のあたりはみえずかもあらむ
天平十三年十月、伊勢国にみゆきしたまひけるとき
聖武天皇御歌

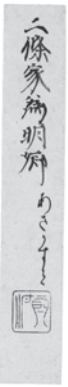
【5】（伝）二条為明　後藤古筆3

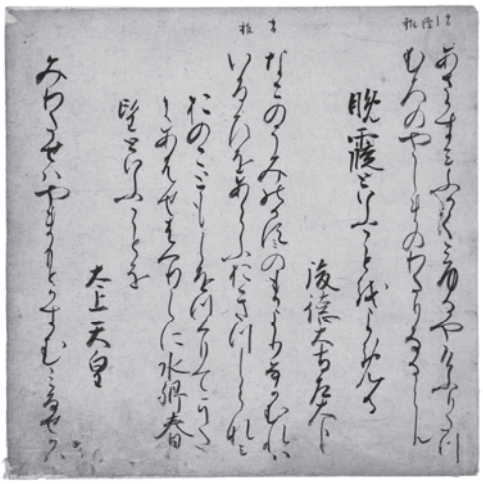
新古今、巻一、春歌上、三四～三六。撰者名注記【有】は有家、【一】は通具、【隆】は家隆、【雅】は雅経。縦十六・五糎、横十六・五糎。

極札表に「二条家為明卿〈あさがすみ〉（墨方印「守村」）」。古筆了仲（分家三代）。本紙裏書「（墨二重枠円印「鼎」）為明卿　了仲外題取ル」。

二条為明は公家。永仁三年（一二九五）～貞治三年（一三六四）。

『日本書蹟大鑑』六所収の『宝積経要品』裏面為明筆和歌短冊と同筆。





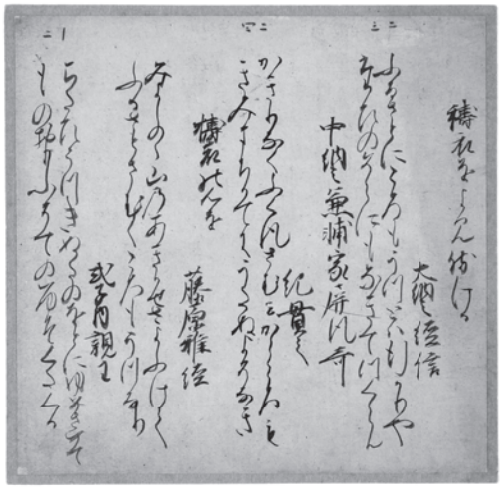
【有】
【一】あさがすみふかくみゆるやけぶりたつ
【隆】むろのやしまのわたりなるらん
【雅】晩霞といふことをよめる
後徳大寺左大臣
【有】なごのうみのかすみのまよりながむれば
【雅】いるひをあらふおきつしらなみ
おのこどもしをつくりてうた
にあはせはべりしに、水郷春
望といふことを
太上天皇
みわたせばやまもとかすむみなせがは

【6】（伝）二条為明　後藤古筆7

新古今、巻五、秋歌下、四八一～四八四。撰者名注記【二】は定家、【三】は家隆、【四】は雅経、【一】は通具。縦十六糎、横十六・四糎。

極札表に「二条家〈為明卿／ふるさとに〉（墨方印「守村」）」。裏書「（墨長方印「了任」）」。古筆了任（分家二代）。本紙裏書「〈十八二／五十〉二条家〈ふるさとに／為明卿〉六半新古今切」。

『日本書蹟大鑑』六所収の『宝積経要品』裏面為明筆和歌短冊と同筆。



擣衣をよみ侍ける
大納言経信
【二】ふるさとにころもうつとは行かりや
【三】たびのそらにもなきてつぐらん

中納言兼輔家屏風歌
紀貫之
【二】かぎりなくふく風さむみからころも
【四】きみまちがてにうたぬよぞなき

擣衣の心を
藤原雅経
みよしの、山のあきかぜさよふけて
ふるさとさむくころもうつなり

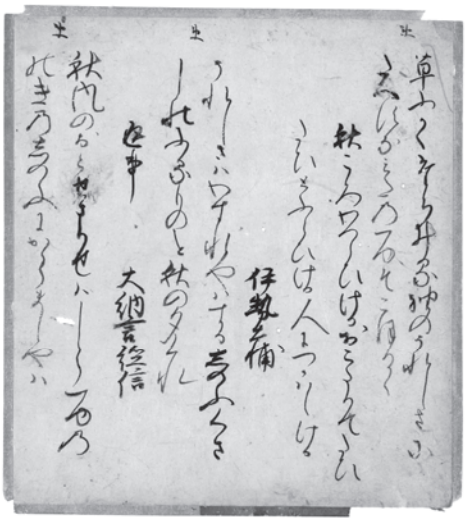
式子内親王
【一】ちたびうつきぬたのをとにゆめさめて
【二】ものおもふそでのつゆぞくだくる

【7】（伝）二条為明　後藤古筆26

新古今、巻十八、雑歌下、一七三一～一七三三。撰者名注記【衛】は通具。隠岐本合点あり。縦十四・九糎、横十三・四糎。

極札表に「二条為明卿」。

『古筆学大成』十一所収の伝為明筆朝倉切本続古今集に筆蹟類似。



【衛】★草ふかくたちゐる袖のうれしさに
たえずなみだのつゆぞこぼるゝ

秋ごろ、わづらひける、おこたりて、たび
たびとぶらひける人につかはしける

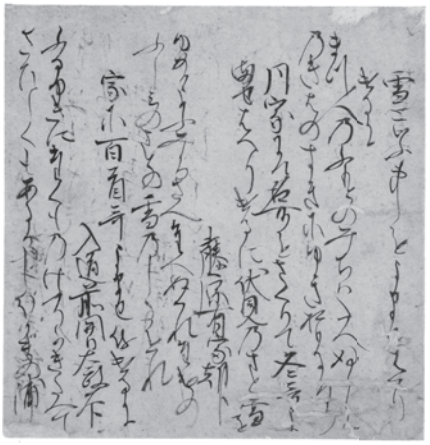
伊勢大輔
【衛】うれしさはわすれやはするしのぶぐさ
しのぶるものを秋の夕ぐれ

返事
大納言経信
【衛】秋風のおとせざりせばしらつゆの
のきのしのぶにかゝらましやは

【8】（伝）二条為明　後藤古筆94

新古今、巻六、冬歌、六七二～六七四。縦十五・四糎、横十五・一糎。

極札表に「二条家庶流為明卿〈雪といふ事を〉（朱瓢形印「随道」）」。畠山牛庵（三代）。



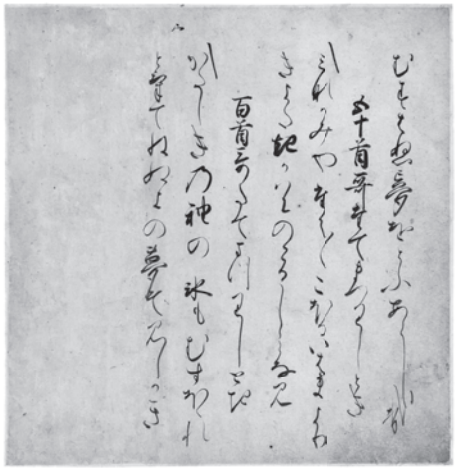
雪といふ事をよま□(せ)はべり
けるに
まつ人のふもとのみちはたへぬらん
のきばのすぎにゆきおもるなり
同家にて、名所をさぐりて、冬歌よ
ませはべりけるに、伏見のさと〔の〕雪を
藤原有家朝臣
ゆめかよふみちさへたへぬくれたけの
ふしみのさとの雪のしたをれ
家に百首歌よませ侍けるに
入道前関白太政大臣
ふるゆきにたくものけぶりかきたへて
さびしくもあるかしほがまの浦

【9】（伝）二条為定　後藤古筆11

新古今、巻六、冬歌、六三三～六三五。撰者名注記【定】は定家。隠岐本合点あり。縦十六・一糎、横十五・七糎。

極札表に「二条家為定卿〈むすばぬ夢を〉（墨方印「琴山」）」。裏書「切己丑四（墨楕円印「了音」）」。古筆了音（六代）。

二条為定は公家。永仁元年（一二九三）～延文五年（一三六〇）。二条為道の男。『古筆手鑑大成』五「世々の友」所収の伝為定筆新古今集切、【10】とツレか。



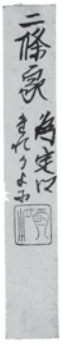
むすばぬ夢をとふあらし哉
五十首歌をたてまつりしとき
★みなかみやたえ〴〵こほるいはまより
きよたきがはにのこるしらなみ
百首歌たてまつりしとき
【定】★かたしきの袖の氷もむすぼゝれ
とけてねぬよの夢ぞみじかき

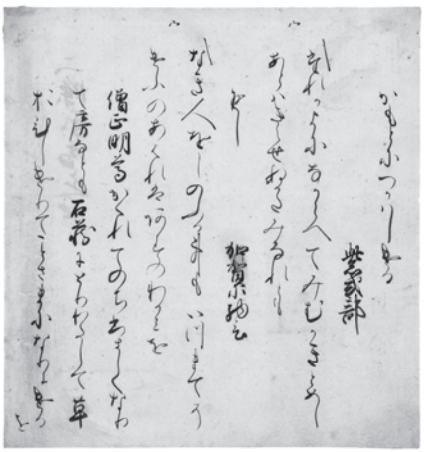
【10】（伝）二条為定　後藤古筆20

新古今、巻八、哀傷歌、八一七～八一九。撰者名注記【定】は定家。隠岐本合点あり。

縦十六・三糎、横十五・四糎。

極札表に「二条家〈為定卿／たれかよに〉（墨方印「守村」）」。裏書「（藍色長方印「了任」）」。古筆了任（分家二代）。本紙裏書「二条家為定卿」。





がもとにつかはしける
紫式部
【定】★たれかよにながらへてみむかきとめし
あとはきえせぬかたみなれども
返し
加賀小納言
【定】★なき人をしのぶる事もいつまでぞ
けふのあはれはあすのわがみを
僧正明尊かくれてのち、ひさしくなりて、房なども、石蔵にとりわたして、草おひしげりて、ことざまになりにけるを

【11】（伝）覚家　後藤古筆4

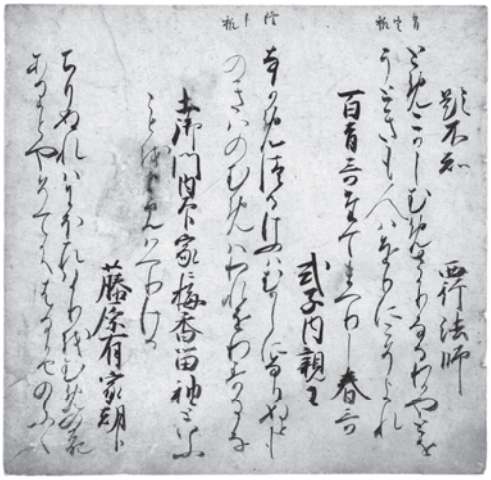
新古今、巻一、春歌上、五一～五三。撰者名注記【有】は有家、【定】は定家、【雅】は雅経、【一】は通具。

縦十六・三糎、横十六・五糎。

極札表に「二条家〈覚家／とめかしむ（ママ）〉（墨方印「式守」）」。平塚平兵衛。本紙裏書「覚家」。

覚家は僧侶・歌人。嘉暦二年（一三二七）～没年未詳。嘉慶二年（一三八八）に生存。二条為定の男。

『徳川黎明会叢書古筆手鑑篇』三「藁叢」所収の伝覚家筆新古今集切と同筆。



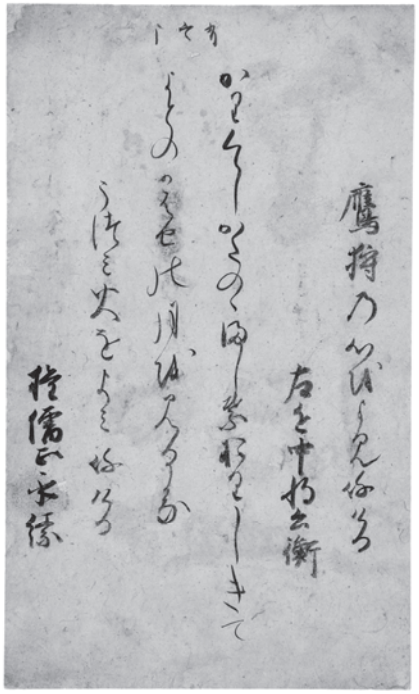
題不知　西行法師
【有】とめこかしむめさかりなるわがやどを
【定】うときも人はをりにこそよれ
百首歌たてまつりし春歌
式子内親王
【隆】ながめつるけふはむかしになりぬとも
【一】のきばのむめはわれをわするな
土御門内大臣家
に、梅香留袖といふ
ことをよみはべりける
藤原有家朝臣
【雅】ちりぬればにほひばかりをむめの花
ありとやそでにはるかぜのふく

【12】（伝）足利尊氏　後藤古筆95

新古今、巻六、冬歌、六八八・六八九。撰者名注記【有】は有家、【定】は定家、【衛】は通具。縦二十一・九糎、横十三糎。

本紙裏書「尊氏公」。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝尊氏筆北山切とツレか。



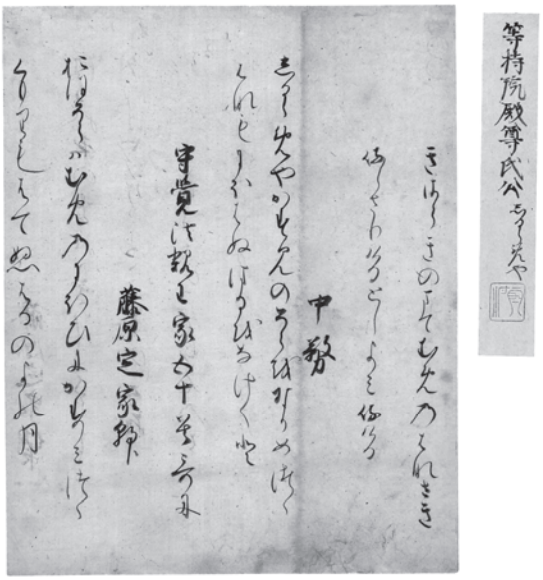
鷹狩の心をよみ侍ける
左近中将公衡
【有】かりくらしかたのゝましばおりしきて
【定】
【衛】よどのかはせの月をみるかな
うづみ火をよみ侍ける
権僧正永縁

【13】（伝）足利尊氏　後藤古筆54

新古今、巻一、春歌上、三九・四〇。縦二十一・八糎、横十七・四糎。

極札表に「等持院殿尊氏公〈しるらめや〉（墨方印「守村」）」。古筆了仲（分家三代）。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝尊氏筆北山類切に筆蹟類似。



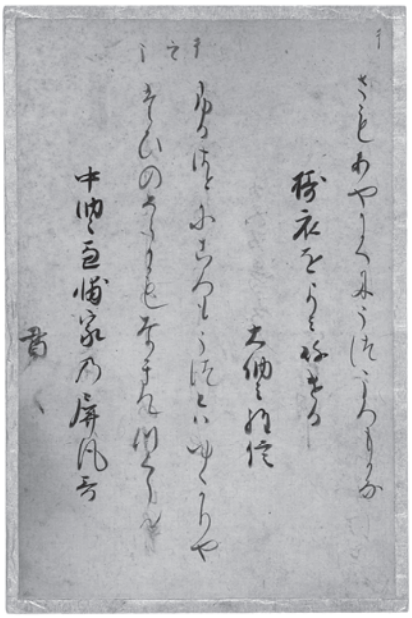
きさらぎのまでむめのはなさき
侍らざりけるとし、よみ侍ける
中務
しるらめやかすみのそらをながめつゝ
はなもにほはぬはるをなげくと
守覚法親王家五十首歌に
藤原定家朝臣
おほぞらはむめのにほひにかすみつゝ
くもりもはてぬはるのよの月

【14】（伝）足利尊氏　後藤古筆115

新古今、巻五、秋歌下、四八〇～四八二。撰者名注記【衛】は通具、【定】は定家、【隆】は家隆。縦二十一・五糎、横十三・九糎。

極札①表に「十四三（合点あり）／尊氏公〈さもあやに〉／四十」。②表に「尊氏公〈さもあやにくに〉（朱方印「養心」）」。裏書「丁亥三（墨方印「定盤」）」。神田道伴（四代）。本紙裏書「名物／北山切」。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の北山切、伝尊氏筆北山類切に筆蹟類似。

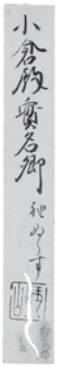


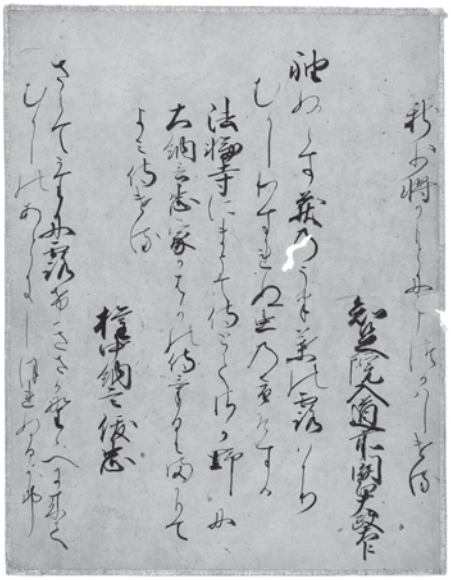
【衛】さもあやにくにうつころもかな
　　擣衣をよみ侍ける
　　大納言経信
【衛】
定　ふるさとにころもうつとはゆくかりや
隆】たびのそらにもなきてつぐらん
　　中納言兼輔家の屏風歌
　　貫之

【15】（伝）小倉実名　後藤古筆41

新古今、巻八、哀傷歌、七八四・七八五。縦二十一・八糎、横十六・九糎。

極札表に「小倉殿実名卿〈袖ぬらす〉（墨方印「琴山」）」。裏書「奥歌さらでだに切癸亥九（墨小楕円印「栄」）」。古筆了祐（三代）。本紙裏書「伊賀切之内　新古今哀傷部」。裏面中央に附箋「伊賀切」。





小倉実名は公家。正和四年（一三一五）～応永十一年（一四〇四）。小倉公脩の男。

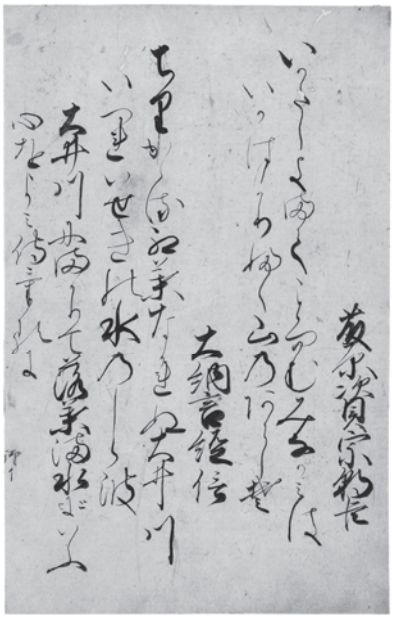
『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝実名筆四半本甲、乙、丙、【16】とツレか。

新少将がもとに申つかはしける
　　知足院入道前関白太政大臣
袖ぬらす萩のうは葉の露ばかり
むかしわすれぬ虫の音ぞする
　　法輪寺にまうで侍とて、さが野に
　　大納言忠家がはかの侍けるに、まかりて
　　よみ侍ける
　　権中納言俊忠
さらでだに露けきさがの、べに来て
むかしのあとにしほれぬるかな

【16】（伝）小倉実名　後藤古筆89

新古今、巻六、冬歌、五五四～五五六。縦二十一・七糎、横十三・九糎。

極札表に「小倉殿実名卿」。本紙裏書「小倉殿実名卿　古筆了珉ノ極札有之類」。



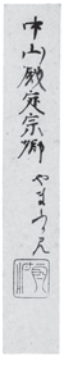
藤原資宗朝臣
いかだしよ待てこと問むみなかみは
いかばかりふく山のあらしぞ
大納言経信
ちりかゝる紅葉ながれぬ大井川
いづれいせきの水のしら波
大井川にまかりて、落葉満水にいふ
心をよみ侍けるに
御イ

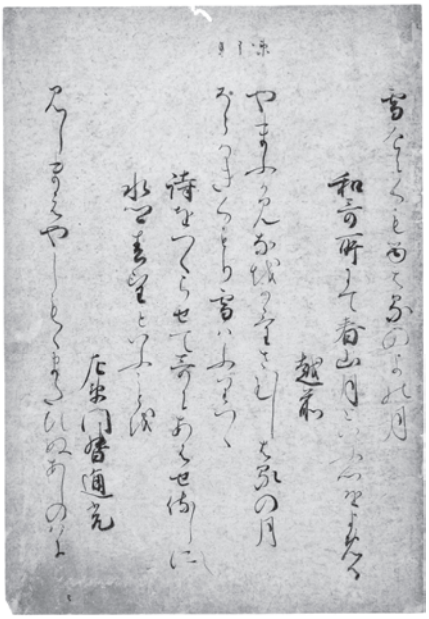
【17】（伝）中山定宗　後藤古筆6

新古今、巻一、春歌上、二三～二五。撰者名注記【衛】は通具、【隆】は家隆、【雅】は雅経。縦二十三糎、横十五・八糎。

極札表に「中山殿定宗卿〈やまふかみ〉（墨方印「守村」）」。古筆了仲（分家三代）。本紙裏書「中山殿定宗卿　了仲札取ル」。

中山定宗は公家。文保元年（一三一七）～応安四年（一三七一）。中山家親の男。『古筆手鑑大成』四「藻塩草」所収の伝定宗筆岡崎切とツレか。





雪げにくもるはるのよの月
和歌所にて、春山月といふ心をよめる
越前
【衛
隆　やまふかみなをかげさむしはるの月
雅】そらかきくもり雪はふりつゝ
詩をつくらせて歌にあはせ侍しに、
水郷春望といふことを
左衛門督通光
みしまえやしも、まだひぬあしのはに

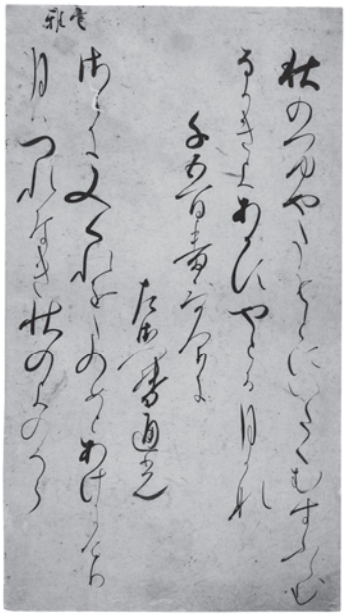
【18】（伝）二条為重　後藤古筆2

新古今、巻三、夏歌、四三三・四三四。撰者名注記【定】は定家、【雅】は雅経。縦二十四・五糎、横十三・六糎。

極札表に「二条家為重卿（墨方印「琴山」）」。裏書「切戊子二（墨楕円印「了音」）」。古筆了音（六代）。

二条為重は公家。正中二年（一三二五）～至徳二年（一三八五）。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝為重筆道也切、『平成新修古筆資料集』三所収の伝為重筆道也切とツレか。



秋のつゆやたもとにいたくむすぶらむ
ながきよあかずやどる月かな
千五百番歌合に
左衛門督通光

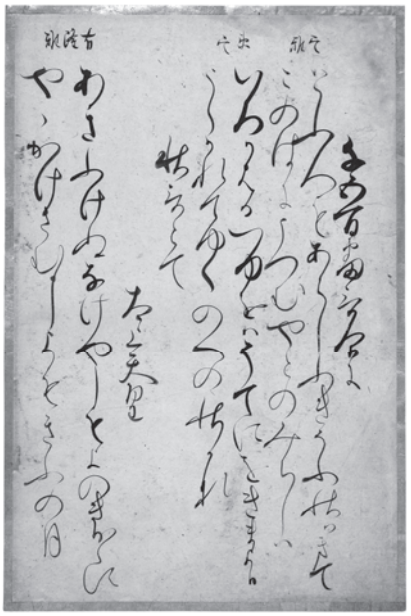
【定】さらに又くれをたのめとあけにけり
【雅】月はつれなき秋のよのそら

【19】（伝）二条為重　後藤古筆8

新古今、巻五、秋歌下、五一五～五一七。撰者名注記【定】は定家、【雅】は雅経、【衛】は通具、【有】は有家、【隆】は家隆。縦二十五糎、横十六・四糎。

極札表に「二条家為重卿〈とふ人も〉（墨方印「琴山」）」。裏書「とふ人も切〈寅／八〉（墨楕円印「栄」）」。古筆了栄（二代）。本紙裏書「為重／道也切」。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝為重筆道也切、『平成新修古筆資料集』三所収の伝為重筆道也切とツレか。



千五百番歌合に

【定】とふ人もあらしふきそふ秋はきて
【雅】このはにうづむやどのみちしば
【衛】いろかはるつゆをばそでにをきまよひ
【定】うらがれてゆくのべの秋かな
秋歌とて
太上天皇

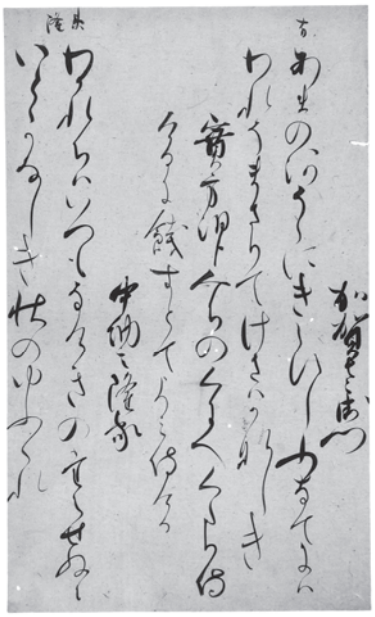
【有】あきふけぬなけやしもよのきりぐ〜す
【隆】や、かげさむしよもぎふの月

【20】（伝）二条為重　後藤古筆21

新古今、巻九、離別歌、八七三・八七四。撰者名注記【有】は有家、【衛】は通具、【隆】は家隆。縦二十四・六糎、横十四・七糎。

極札表に「二条家〈為重卿／あまの河〉（墨方印「琴山」）」。古筆了栄（二代）か。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝為重筆道也切、『平成新修古筆資料集』三所収の伝為重筆道也切とツレか。



加賀左衛門

【有】あまの河そらにきこえしふなでには
われぞまさりてけさはかなしき

実方朝臣みちのくにへくだり侍
けるに、餞すとてよみ侍ける

中納言隆家

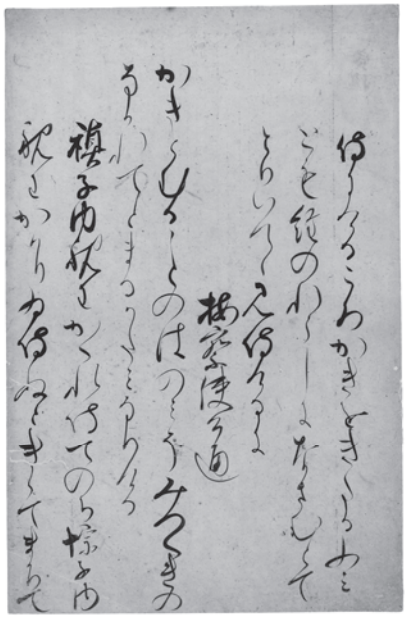
【衛】わかれぢはいつもなげきのたえせぬに
【隆】いとゞかなしき秋のゆふぐれ

【21】（伝）二条為重　後藤古筆42

新古今、巻八、哀傷歌、八二六・八二七。縦二十五・二糎、横十六・四糎。

極札表に「二条家為重卿〈侍りける〉（墨方印「琴山」）」。裏書「侍りけるころ切寅極（墨小楕円印「栄」）」。古筆了栄（二代）。本紙裏書「寅極」。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝為重筆道也切乙、丙と同筆。



侍りけるころ、かきをきたるふみ
ども、経のれうしになさむとて、
とりいでゝ見侍けるに

按察使公通

かきとむることのはのみぞみづくきの
ながれてとまるかたみなりける

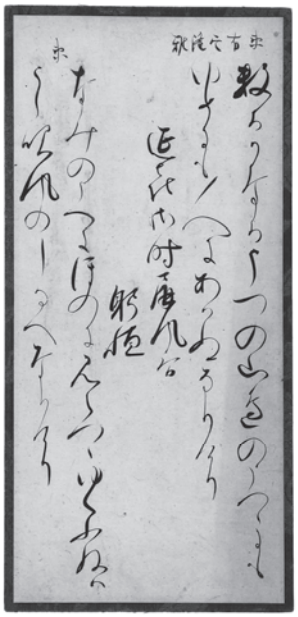
禎子内親王かくれ侍てのち、悰子内
親王かはりゐ侍ぬときゝて、まかりて

【22】（伝）二条為重　後藤古筆114

新古今、巻十、羇旅歌、九〇四・一九八九。切出し歌を本文中に含む本の切。撰者名注記【衛】は通具、【有】は有家、【定】は定家、【隆】は家隆、【雅】は雅経。縦二十四・九糎、横十一・五糎。

極札①表に「二条為重卿〈するがなる〉（墨方印「琴山」）」。裏書「端するがなる／奥くさまくら〈上句斗〉／切　戌九（墨楕円印「栄」）」。古筆了栄（二代）。②表に「十九二（合点あり）／二条為重卿〈するがなる〉／五十一」。本紙裏書「名物／道也切」。

『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』所収の伝為重筆道也切、『平成新修古筆資料集』三所収の伝為重筆道也切と筆蹟類似。



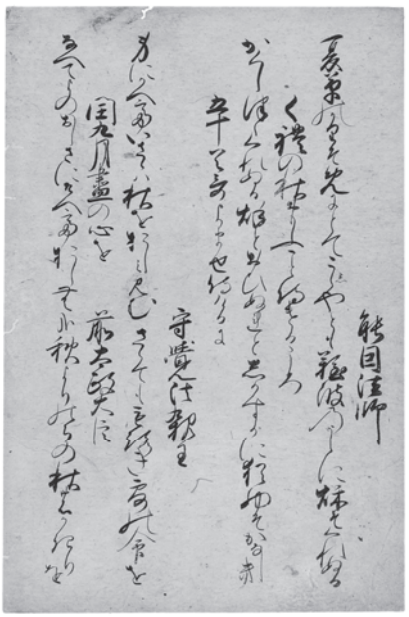
【衛
有
定　するがなるうつの山辺のうつゝにも
隆　ゆめにも人にあはぬなりけり
雅】
延喜御時屏風歌
躬恒
【衛】なみのうへにほのに見えつゝゆくふねは
うら吹風のしるべなりけり

【23】（伝）青蓮院尊道　後藤古筆88

新古今、巻五、秋歌下、五四七～五五〇。縦二十五・六糎、横十七糎。極札表に「青蓮院宮尊道親王〈夏草の〉」。本紙裏書「青蓮院殿尊道親王〈極札有之類〉」。

尊道親王は後伏見天皇の皇子。正慶元年（一三三二）～応永十年（一四〇三）。青蓮院門跡、天台座主。

『徳川黎明会叢書古筆切篇』五「古筆聚成」所収の伝尊道筆満願寺文殊堂勧進文に筆蹟類似。



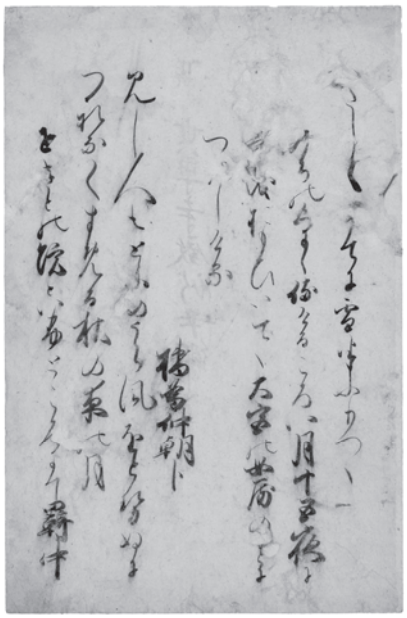
能因法師
夏草のかりそめにとてこしやども難波のうらに秋ぞくれぬる
くれの秋、おもふこと侍けるころ
かくしつゝくれぬる秋とおひぬれどしかすがに猶物ぞかなしき
五十首歌よませ侍けるに
守覚法親王
身にかへていざゝは秋をおしみ見むさらでももろき露の命を
閏九月尽の心を
前太政大臣
なべてよのおしさにそへておしむ哉秋よりのちの秋のかぎりを

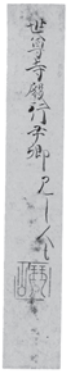
【24】（伝）世尊寺行尹　後藤古筆57

新古今、巻十、羇旅歌、九二九～九三一。縦二十三・一糎、横十五・二糎。

極札表に「世尊寺殿行尹卿〈見し人も〉（墨方印「琴山」）」。裏書「切　庚寅三（墨楕円印「了延」）」。古筆了延（七代）。本紙裏書「世尊寺殿行尹卿」。

『古筆学大成』十一所収の伝行尹筆新勅撰集切に筆蹟類似。





□（か）たしく□（そ）でに雪はふりつゝ
みちのくにゝ侍けるころ、八月十五夜に、
□（ゆ）をおもひいでゝ、大宮の女房の□（も）とに
つか□（は）しける
橘為仲朝臣
見し人もとふのうら風をとせぬに
つれなくすめる秋の夜の月
せきどの院といふところにて、羇中

前期

【参考】新古今和歌集　後藤111　911.1358-Si

鎌倉時代写、巻子本、一巻。巻五、秋歌下のみ。箱書によると藤原家隆筆。『古筆学大成』十所収の伝藤原家隆筆「祐海切」と同筆。

後期

【参考】新古今和歌集　後藤116　911.1358-Si

南北朝時代頃写、列帖装、一冊。残欠本で、現存和歌は一六一七～一六六四、一六七四～一七七七、一七八九～一八二二、一八三五～一八四七、一九四二～一九七八（巻軸歌）。

【参考】新古今和歌集　後藤121　911.1358-Si

南北朝時代頃写、列帖装、一冊。巻一、春歌上～巻十、羇旅歌。巻末の遊紙裏に識語「這集為秀卿筆跡／分明者也／寛永第十三（一六三六）小春下澣／亜槐藤（烏丸光広の花押）」。冷泉為秀は、南北朝時代の公卿。応安五年（一三七二）没、七十余歳。

前期・後期

【参考】慶安手鑑　神皇　728.03-Ko

版本、特大本、一冊。無記名序、称硯子奥書、慶安四年（一六五一）刊。古筆手鑑の模刻。聖武天皇・光明皇后・聖徳太子～日比正広・〈牡丹花門弟〉月樵・〈医師〉故道三等の古筆切百三十六点、後宇多院・後光厳院・後小松院～小野於通・宮内卿〈板倉伊賀守殿内衆〉・古筆庵（了佐）等の短冊六百十六点を収録。

【参考】思ひよる日　神皇　728.03-Ko

版本、大三ツ切、一冊。古筆了伴編、榊原偽謙校。弘化四（一八四七）年古筆了伴自序。嘉永元年（一八四八）刊。古今名家の忌日の一覧。収録されるのは、古筆鑑定家である編者が筆蹟を見たことのある人々。月日順に名・号を列挙し、姓・没年・享年等を注記する。

【参考】古筆名葉集　岡谷609　728.02-T

版本、小本、一冊。陶々居編。無腸序、文化元年（一八〇四）陶々居序、文化五年（一八〇八）刊。古筆切の分類目録。筆者別に名品を列挙し、簡略な説明を付す。